

財団法人国際高等研究所
1998年度（平成10年度）
事業計画

本財団の設立理念に照らし、基本構想の具体化に努める。また、関西文化学術研究都市における中核的施設としての役割を果たすことを目指して、「学者村」の礎を築くべく、研究事業を中心とする事業運営の活性化に向けた取り組みを行う。

1998年度の重点事項をはじめとする事業計画は、以下のとおりである。

[1] 総括

〔1〕卓越した研究者の招へい

本研究所の研究環境を活かし、研究活動の活性化を図るため、国内外の卓越した研究者を「招へい学者（IIAS Fellow）」として招へいするとともに、各分野で中核として研究を推進している研究者を「招へい研究者（IIAS Researcher）」として招へいする制度を新設する。

〔2〕若手研究者の育成

優秀な若手研究者の研究を奨励するために設けた、2年を限度とする「特別研究員」制度を活用し、若手研究者の育成を図る。

〔3〕研究事業の積極的な推進

1998年度から、新たに3研究プロジェクト（課題研究）を発足させるとともに、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」として申請中の新規プロジェクトの推進を図る。

なお、これまで行ってきた「課題研究」ならびに「準備研究」の他に、新たに短期間の研究によって、その成果の取りまとめを行う小規模のプロジェクトや、フォーラム等を開催し、研究活動の一層の活性化を図る。

〔4〕研究成果の取りまとめ及び評価

1997年度で終了する研究プロジェクトについては、その研究成果を1998年度内に取りまとめるとともに、学術出版や研究成果を一般に公開する講演会の開催等、研究成果の公表に努める。

また、研究成果に関する評価システムの確立を図る。

〔5〕研究環境の整備及び情報発信機能の充実

本研究所の情報基盤を整備・拡充し、高度情報化に向けた取り組みを推進する。情報メディアを活用し、研究活動及び研究成果の公表を行うとともに、学術出版や広報活動等についても積極的な展開を図る。

〔6〕研究資金の充実

運用財産の一部を研究資金として活用するとともに、公的資金の導入を図る。また、企業等の協力を得て賛助会員の募集に取り組み、研究資金の安定確保に努める。

[2] 研究事業の推進

「1」 課題研究

1998年度における課題研究は、継続研究である3プロジェクトと、1997年度の準備研究の成果を踏まえ、課題研究に移行する3プロジェクトの計6プロジェクトを推進する。

(1) 「自己家畜化現象と現代文明」 (1996年度開始、98年度終了予定)

「自己家畜化現象」とは、1930年代にドイツの人類学者によって提唱された概念で、人類が自ら作り出す文化的環境によって、自己をあたかも家畜のように自然から切り離された存在として進化してきたことをいう。

これは、人類進化論上の仮説としてだけではなく、現代文明下のヒトを理解するためのメタファーとしても有効であると考えられる。このプロジェクトは、自己家畜化という概念ないしメタファーを様々な専門分野の研究者によって検討し、現代文明下のヒトに見られる身体的、行動上の諸問題に対処するための基本的な理念を創造することを目的としている。

既に2年間にわたる研究を行ったが、1998年度は最終年度として、従来の小規模研究会やワークショップ等の研究集会以外に、一般を対象とする学術講演会及び公開セミナーを開催する。さらに研究事業を総括する国際シンポジウムを開催するとともに、研究成果の出版に向けて最終的なまとめを行う予定である。

研究代表者：尾本 恵市 国際日本文化研究センター教授
国際高等研究所特別委員 (人類進化学)

(2) 「生命体の多様性」 (1996年度開始、98年度終了予定)

DNAをキーワードとした生物学が飛躍的に発展を遂げた20世紀後半において、生物の多様性に関わる研究はそれほど目立った成果を上げることができなかった。これは、生物学の解析技術が、多様性研究に相応しい発展を遂げていなかったためでもあった。最近になって、生物多様性は生物の生存にとってどのような意味を持つかの解析が実証的な研究対象となる部分が増えてきて、この分野の研究課題が広く関心を喚ぶようになってきた。

一方、地球環境に及ぼす人為の影響が生物多様性を圧迫している現実と、人口増や人間生活の多様化に伴って増大する資源への要求に応えるための遺伝子資源の確保と開発への希求が、生物多様性研究の推進を社会的課題として要求するようになってきた。

このような背景の下に、かつては個別に進められてきた生物多様性研究が、生物学の広い範囲の解析技術を必要とするようになったことから、これまでのような細分化された領域内での研究に留まらず、生物学のさまざまな分野の研究の技法を統合した形で推進できるように、その課題の探索と具体的な組織化を目指す研究を行うことを目的とするものである。

既に2年間にわたる研究を行ったが、1998年度は最終年度として、従来の研究集会以外に、生物多様性研究の今日における総合的像を描き出す国際シンポジウムを開催するとともに、研究成果の出版に向けて最終的なまとめを行う予定である。

研究代表者：岩槻 邦男 立教大学理学部教授
国際高等研究所企画委員 (植物分類学)

(3) 「言語の脳科学」(1997年度開始、99年度終了予定)

近年非侵襲的手法の普及により、人間の脳の活動を可視化できるようになってきた。これにより、人間固有の機能である言語処理の脳内メカニズムを理解できる可能性が出てきた。

しかしながら言語の処理過程はコミュニケーションという大きな目的を実現するための部分過程であることも認識しておかねばならない。従って、子供(言語・非言語)のコミュニケーション能力の発達の研究、失語症やある種の失語症に関する神経心理学的研究等広い視野からコミュニケーション過程の計算論的枠組みを提案することも急務であると思われる。

本研究プロジェクトでは、言語心理学、神経心理学、発達心理学、認知科学、計算論的神経科学などの研究を背景に、言語の脳内過程に関する理論的枠組みを構築することを目的とする。

従来の理論生命科学「脳と心」研究プロジェクトの研究成果を踏まえ、1997年度において新規に立ち上げた研究プロジェクトである。1998年度においては、1997年度における研究によって言語処理に関する脳研究の方向付けがかなり明確になってきたので、これらを踏まえて、言語獲得と理解に関する問題に絞って研究を推進する。そのため、研究集会と公開シンポジウムを開催し、これらに合わせて海外(欧米)からの招へい研究者の確保を図る予定である。

研究代表者：乾 敏郎 京都大学文学部教授

国際高等研究所企画委員(心理学、認知科学)

(4) 「生物研究と生命—生物学の統合化と生命概念形成への寄与—」

(1998年度開始、2000年度終了予定)

1997年度における準備研究「20世紀の『生物研究』から21世紀の『生命研究』を考える」の研究成果を踏まえ、1998年度より本格研究に着手する。

20世紀の生物学は、地球上の全生物がDNAを遺伝子としていることを基本に、生命現象を解明した。この研究が急速に進展し魅力的な生命像を描き出したために、遺伝子で行動や、時には社会現象まで説明しようとする風潮が現われ、生物学外で遺伝偏重の生命観が喧伝されている。一方、生物学では、DNAを基本にしながら、多様な生物を対象にして、発生や進化の研究が進み、個体の形成、種間の関係などが解明されつつある。このような成果から生まれつつある統合生物学を踏まえ、更には生物史の中に見られる還元主義では把握できない側面にも眼を向け生物学として納得のいく生命観を提案したい。

1997年度では20世紀の生物学各分野の研究の流れを実体的に捉えたが、1998年度においては、それがどのような形で統合されて行くのかを研究集会を開催して探る。また、生物学史を専門とし、特に今後の生物学の方向について、Integrated Biologyという視点に基づき研究を進める米国研究者を1~2ヶ月間招へいすることを予定する。

研究代表者：中村 桂子 生命誌研究館副館長

国際高等研究所企画委員(生命科学・生命誌)

(5) 「科学の文化的基底」(1998年度開始、99年度終了予定)

1997年度における準備研究の研究成果を踏まえ、1998年度より本格研究に着手する。

科学の文化的基盤ないし背景を、古代オリエントの科学、ギリシアの科学、インドの科学、中国の科学、イスラムの科学、中世ラテン世界の科学、近代ヨーロッパの科学等について比較考察し、さらに現代科学の文化的基底を明らかにして、21世紀における科学と文化のあるべき関係を考える。

1998年度の本研究においては、古代オリエント、ギリシア、イスラム、インド、中国、中世ラテン世界およびルネサンスの科学以後の近代および現代の科学について、研究集会を中心にその文化的基底を明らかにしたい。その際、日本における近代科学の受容と伝統文化との関係も取り上げる。

研究代表者：伊東 俊太郎 麗澤大学比較文明研究センター教授・センター長
国際高等研究所特別委員(科学史・科学哲学)

(6) 「環境と食糧生産の調和に関する研究—人類生存の視野から—」

(1998年度開始、2000年度終了予定)

1997年度における準備研究の研究成果を踏まえ、1998年度より本格研究に着手する。

人口の増大に伴って、環境問題と食糧生産のジレンマは拡大していく。この地球上に人類が生存を続けていくには、両者の調和をどこに求めたらよいのか。その解決はもちろん簡単ではないが、人類が抱えるもっとも緊急な課題の一つである。

本研究は、当面、地球および地域環境論、食糧生産、人口問題、発展途上国の課題、そして国際食糧問題と食糧政策などの分野の経験豊かな専門家を集めて共同討議を重ね、学際的なアプローチによって、上の課題の解決の手がかりを得て、その総観的な見取り図を描き出そうと企図する。

1998年度は「アジアからの発想」を共通のテーマとする。

年度当初にシンポジウムを開催し、共通認識の形成を図り、共通の研究課題を明らかにする。

研究集会を通じてメンバーの課題研究の成果を検討する。さらに、中国・インド地域への研究者延べ4名の派遣を行い、実地調査を予定する。

研究代表者：渡部 忠世 京都大学名誉教授

国際高等研究所企画委員(農学・作物学)

「2」日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「近未来の法モデル」

1997年度における準備研究「21世紀の法モデル」の研究成果を踏まえ、「近未来の法モデル」を日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」に1998年度の研究プロジェクトとして申請しているものである。

本研究課題の趣旨は、情報社会における情報と知的財産の創造と流通に関する著作権市場「コピーマート」について、法モデルを策定することにある。

具体的な研究課題は1) 情報社会の構成単位である知識ユニット論、2) コピーマ

ートモデルのハードウェア・ソフトウェアのシステム研究、3) 革新的な技術のモデル化によるコピーマートモデルの構築、4) コピーマートモデルの法的分析、5) 科学の発展、デジタル技術の浸透、経済のグローバル化、地球環境保護、紛争解決制度、知的財産、人間と社会、国際機構と国家法秩序等に関わる重要問題へのコピーマートの応用研究に分かれる。

これらの問題別にワーキンググループを編成し、研究集会、国際シンポジウム、外国の研究グループとの共同研究等を予定する。

研究代表者：北川 善太郎 国際高等研究所副所長（民法）

「3」準備研究

準備研究とは、本研究所の課題研究になり得るか否かの検討と、課題研究として採択された場合に研究計画を円滑に実施できるよう、概ね1年を目途に準備的な研究を行うものである。

1998年度においては、次の課題について推進を図る。

(1) 「臨床哲学の可能性—生命環境の諸問題を軸として—」

「臨床哲学（clinical philosophy）」とは、現実社会の具体的場面で生じる哲学的な治療を必要とする問題を、自らも「医者」ではなく「患者」の一人として考えていこうとする新しい試みである。

本研究は、人が生きる現場に生じた具体的問題から出発して、既成の知見を揺さぶり編み直しながら、新たな概念や思考のスタイルを紡ぎ出していこうとするものであり、具体的には、クローン人間、脳死、遺伝子食料、公的介護、生殖技術等の「生命環境」をめぐる問題に焦点を絞って取り組む予定である。

研究代表者（候補者）：野家 啓一 東北大学文学部教授（哲学）

(2) 「物質科学の新しい展開を目指して」

新しい機能をもつ物質の開発は、無限の可能性を秘める研究分野である。

これらの新物質を発見するまでの経過は様々であるが、化学と物理の両分野にまたがる推論と実験的手法が基礎となる。また、理論面では高温超伝導の発見以来、強相関電子集団が今までの単純な抽象では理解できない様々な可能性をもつことが徐々に解明されてきたが、その全体像はいまだに未知の闇に隠れている。一方、化学及び物理両面サイドから理論計算による物質生成過程の研究が進められていたが、最近ようやく両者の融合が実現しつつある。さらに、物質加工の面でも、ナノメートルのシステム工学が展開されているが、これは新機能物質の開発と密接に関連した分野である。

ここで物理と化学の協力を促進し、さらに物質加工も含んだ物質科学の新しい発展が生まれるような幾つかのフォーラム、研究会を開催し、物質科学ならびに物質工学（単原子から物質構築）の立場から、物性解明方法を探索する。

研究代表者（候補者）：金森 順次郎 大阪大学名誉教授（物性物理学）

(3) 「政府統治 (government governance) の研究—現代日本政府の統治構造—」

現在のわが国においては、政府の過剰介入がむしろ弊害と見なされつつあり、政府の行動と公共目的が乖離し様々な諸問題が噴出している。また、行政改革の試みが成果を上げられないのは、政府の問題に対して十分な理論的検討がなされていないことに起因している。そこで、政府に対して、政府をいかに機能させるのか、統治者としての政府を統治する者は誰か、政府の改革が進展しないのは何故か、という根本的な問いかけが大きな意味を持っている。

本研究は、政治哲学の問題に対して、組織理論を用いることにより経済学的に接近しようとする学際的な取り組みである。

この研究プロジェクトでは、日本型政府の問題を射程に入れ、1) 政府の役割、2) 政府の内部組織、3) 政府・企業間関係の規制、4) 公共事業の費用便益分析と政治的意思決定の4サブテーマを設け、政府統治 (government governance) の理論の構築を目指す。

研究代表者 (候補者) : 本間 正明 大阪大学経済学部教授 (公共経済学)

(4) 「複雑系と社会科学の方法」

本研究は、社会科学の分野に限定して、複雑系が社会科学の方法や、哲学にもたらす新しい考え方を総合的かつ鋭角的に探ることを目指す。具体的な課題は、1) 複雑さへの再認識による社会科学の批判・反省、2) 複雑さを考慮に入れた社会科学の研究プログラム、3) 科学観の変革である。

研究代表者 (候補者) : 塩澤 由典 大阪市立大学経済学部教授 (数理経済学)

(5) 「ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理問題とそれへの対応」

遺伝子医療がわが国の医療に適用されつつある現状にあって、このような先端的医療の指針は一部の学会の方針にとどまっている。ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理観を、そのままには受け入れ難い文化、社会、宗教的な背景を有するわが国 (アジア圏) では、ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療を導入するために明確な論理が必要となる。

本研究は、このような問題を、医学・生物学研究の立場を中心に総合的に研究し、具体的な対応について提案することを目指す。

研究代表者 (候補者) : 武部 啓 京都大学大学院医学研究科教授 (遺伝学)

「4」受託研究

宇宙開発事業団から1998年度「JEMの人文社会的利用法に関わる調査研究」の継続委託を予定する。

本受託研究は、1996年度の準備的調査研究を踏まえ、1997年度において宇宙開発事業団より「JEMの人文社会的利用法に関わる調査研究 (その2)」を受託した。

これは、2001年に予定される地球周回軌道上の宇宙ステーション取り付け型日本実験モジュール (JEM) の打ち上げを契機として開始されるJEMの利用に際し、人文・社会科学領域からみたJEMの活用方策、ならびにその意義に関して基礎的な調査研究を行うものである。

〔5〕共同研究事業

(1) 京都大学数理解析研究所との共同研究

1997年度から開始された京都大学数理解析研究所との共同研究について、1998年度も事業化を図る。

〔3〕情報・出版事業ならびに研究成果の公表

1997年度において研究事業が終了した下記の課題研究プロジェクト、ならびに特別研究「沼記念プロジェクト」について、1998年度中にその研究成果を取りまとめるとともに、学術出版、研究成果を公開する講演会や国際シンポジウムの開催等、研究成果の公表に努める。

- (1) 課題研究「安全科学」
- (2) 課題研究「数理科学」『複雑系の秩序と構造』
- (3) 課題研究「哲学」『情報論的転回』
- (4) 課題研究「比較幸福学」
- (5) 課題研究「社会情報学」
- (6) 課題研究「わざ学」
- (7) 特別研究「沼記念プロジェクト」

〔4〕一般公開事業

〔1〕一般公開講演会

けいはんな学研都市の中核的研究施設としての理解を深めて貰うため、広く一般の方々を対象に、公開講演会を企画・開催する。

〔2〕『親子』サイエンス・スクール

「少年・少女」サイエンススクールは、21世紀を担う子供達を対象に、著名な研究者との触れ合いを通して創造性と科学への夢を導き出すことを目的として、1994年度から始めたセミナー事業である。

1997年度は、諸般の事情により1泊2日のプログラムを変更し、日帰りの「親子」サイエンススクールとして実施した。

1998年度においても同様の企画にて開催を予定する。

〔5〕広報活動

(1) 広報誌「こうとうけん」ならびに「IIAS NEWS LETTER」の発行

広報誌「こうとうけん」ならびにニュース誌「IIAS NEWS LETTER」の一層の充実を図り、関係機関ならびに関係者に配布する。

(2) インターネットホームページの充実

本研究所の概要ならびに活動内容等を広報するために設けたインターネット上のホームページの充実を図る。

ホームページのアドレスは、「<http://www.iias.or.jp/>」。